

ゴダンさんはその光をじっと見つめながら、小さな声で

「ベンケイさん、ガイジンキライマス、ワタシ、ヨクワカリマス。ベンケイさんハセンソウキライデス、ダカラガイジンキライデス、ヨクワカリマス」

ゴダンさんのフランスのおじいさんは第一次世界大戦の時、右足を失ったという。

「ワタシモセンソウキライ。ニホンノオンガクハワタシニハイワヲオシエマシタ。コノコトホントウデス」

聡子はゴダンさんの言葉を聞いて目頭が熱くなった。灯籠が自分の目の中にゆっくりとにじんで

入ってくる。

「アリガトウゴザイマス。ミナサン、シンセツニシテクダサイマシタ」

ゴダンさんは橋のたもとから、しっかりと最後の灯籠を見ながら、この明かりはカナダの教会のろうそくの光につながるものがあると聡子に話した。

(十四)

「いかん、いかん、またようけ話してしもうたわ」
翌朝、検番に書類を届けるおつかいから帰って

きたお伊セさんは、ポンと自分の口のあたりをふさぐようなしぐさをしながら、帳場のところにいる聡子にこう言っ

「おばちゃん、何話したん？ 誰と話したん？」

「番頭はんや。あのな、きよう昼から浴衣会やろ、弁慶さんもおったで。もう朝稽古すんで、着替え

に入っただけどな」

「ふうん、なんや、弁慶さんと話したんちがうんか」

「いやな、何せ、ほれ、ゴダンさんももう帰るっ

ちゆうて、ほれ、こないだの嘆願書な、あれな、番頭はん、弁慶さんに渡すの忘れてたんやって。あの人のこのごろようわっせるんやって、用をな、いろいろ。自分で愚痴ゆうてたわ」

「弁慶さんに今頃渡してもなんにもならんわな、おばちゃん」

「あんた、あの話、番頭さんにちよつと話したわ。弁慶さんには内緒ゆうといたけど」

番頭の真田はんはおしゃべりなのに、何を話したのだろう。

「いやいやすぐにはゆわんやろ。夕べ、聡子ねえ

ちゃんが灯籠流しから帰って、私にお風呂でゆうたことや」

「ああ、あのことが、ゴダンさんのフランスのおじいちゃんのこっちやる」

「へえ。気の毒ゆうてな、おじいさん、おみあし、戦争でなくされたってな、ほれ、真田の番頭さん

の兄さんも傷痍軍人さんなんで。昭和二〇年、レ

イテ島やってな。それも味方の手榴弾や」

おいせおばちゃん、おしゃべりやな。いかん、

いかん。やつぱり話さんほうがよかった。

昼前の急行に乗りたいたいというゴダンさんが

支度を終えて、玄関に出て来た。おいせさんは、

うとしている。

聡子は夕べ、寝る前に倉之助が言った言葉を思

い出していた。

「あのゴダンさんっちゆう人はまさに『ふつぜ』

やな。ふつぜというのは、不出生ということなん

やが、田んぼから落ちこぼれた種のようなもので、

思いもかけないところから実り出す稲穂やさくら

のひこばえを思えばよいわ。カナダという田んぼ

から落ちこぼれた美しい稲穂のような人やで」

「おとうちゃん、フツゼノムスメやな。ゴダンさんは

「うん、そういうとこや！」

「ひやー、もう行かれるんですかいな！ トミちゃん、トミちゃん、はよ、はよ、おいで。ゴダンさん、帰るんやでえ」

琴平駅に聡子とタカ、そして、福代がゴダンさんを見送りに出かけた。

気のせくタカが早すぎる時間というのにタクシ

ーを呼んで、「遅れたらいかん」と出かけたせいで、

まだ急行が入ってくるのに二十分も駅で待たなければならぬ。

ゴダンさんは駅の前に立って、象頭山をカメラにおさめている。その姿はほんとうにひょうひよ

ゴダンさんはしっかりお山をカメラにおさめた

ようだ。聡子たちは象頭山のことを親しみを込め

て「お山」と呼ぶ。

「はっ、あれ、弁慶さんやないか！」聡子が気づいて叫んだ。

ほんとうだ。駅からまっすぐに見える道、高灯籠を越えたあたりに日本髪の浴衣姿の弁慶さんが見える。その後ろを引きずられるようにとも蝶さんの姿が見える。なんだ、二人とも走っているではないか。

「ばあちゃん、おかあちゃん、弁慶さんやで。とも蝶さんも」

「なんや、なんや。何しに来たんや」

弁慶さんは一気にタカたちのところに駆け寄る。

「なんや、あんた。きょうは浴衣会やのうて、芸者のマラソン大会かいな！」

ゴダンさんはさすがにびっくりした顔をしている。弁慶は息があがっている。はあはあといいなが

「御家はん、若奥さん、ゴダンさん、ほんま許し

高松からの電車から降りた人たちも、そして、これから高松方面の急行に乗る人も、みんな弁慶さんたちを見ている。

「かましません。ほれ、そこに座ろ、とも蝶。ゴダンさん、数々のご無礼お許しください」

広い待合所の古いベンチに正座して、背をすつと伸ばして、深い息を一つ吸い込むと、弁慶さんはタカから受け取った三味線をしっかりと持ち、

「とも蝶、『さわり』んとこやで」

てください。今、番頭はんに、紙もろうて、それに、足、足、ゴダンさん、おじいさん、足がのうなつて」

タカは目を白黒させていた。福代はあつけにとられてる。

「足がなんなんや。あんたそれより三味線、受け取ったかいな」

「へえ、持つて来ました。ほれ、これで、今、弾かせてもらいます」

「ほつ、ここぞか」

「へえ、ここで弾かせてもらいます」

駅長さんが飛び出してきた。

鏡獅子のいちばんいいところであった。

ゴダンさんは向かい合ったベンチのところにさつと座り、膝にきちんと両手を置いて、聞き入っている。

「ああ。もう来るで。急行、乗らんとあかん」

急行はもう目の前に入ってきている。

この日、琴平駅で急行は二分遅れて発車した。

駅長さんは始末書のものであろう。

ゴダンさんは窓から、三味線を弾き続ける弁慶さんと唄いつづけるとも蝶さんに長い手を振っ

た。ホームのタカたちはしつかりと何度も声をかけた。

「ゴダンさん、また来てや！ 待つてるでえ」

「ゴダンさん」

三味線は急行が見えなくなつてからも音が途絶えず、まわりには見物が取り囲むようであつた。

聡子は弁慶さんがなんだかこの世の人のように思えなかつた。とも蝶さんと二人、そのベンチだけ別世界のように思えた。

その夜、タカは弁慶さんが返してきた三味線を

でゆうたんや」

「へえ、あんたそんなこといっおぼえたんや？」

「夕べ、灯笼流しんとき」

「へえ、オベントー…ゆうて別れるんか！」

倉之助がゆつくりとタカと聡子に割つて入るよ
うにつぶやいた。

「アビヤントオ」

「うん、また会えるわ。じきに」

「フツゼノムスメか。ええな。待つてよおな。必ず会えますわ」

倉之助は自分に言い聞かせているようであつた。
弁慶もええことしたわ。最後になつたけど、弾い

なでながら、聡子と倉之助にしみじみと言つた。

「弁慶はいつこくなだけにきちんとしてるわ。こ

の三味線は今度ゴダンさんが来た時だけさわらしてもらうつて」

「ばあちゃん、この三味線高かつた？」

「内緒。内緒や」

「ほんまに買うたん？」

「いや、それより、ゴダンさん、最後にオベント
ーつてゆうてたけど、おなかすいてたんやなあ」

「違う違う」聡子はケラケラと笑いながら、

「あれは別れの言葉や。英語でなくて、フランス語

てやったんやから。今度、ゴダンさんが来た時は頼
む前にうちに来てくれるわ。

タカはなぜか目をうるませていた。なんか私、
寂しいわ。人手が足りんようになったからではな
いわ。

三味線は神棚のそばに置く。ゴダンさんが早よ
う戻つてきてくれるように。

「はあー。お金毘羅さん、お天道さまどうかお願
します」

聡子もタカも倉之助も、まだ誰もゴダンさんが
自分で片付けた住み込み部屋のちやぶ台の上にゴ

ダンさんの書いた札状が残されていることは知
らない。英語で書かれているが、倉之助や聡子が
どうにか訳すであろう。

「すし辰の皆さん

ほんとうに私のような突然の訪問者を親切にし
てくださってありがとうございます。

わたしは九月にカナダに戻る事になっていました。こ
の事をどうしても皆さんにお伝えすることがで
きませんでした。
今度、いつ日本に戻る事ができるか、私自身に
もわかりません。

「ご主人さまの教えてくださった「ふつぜ」という
言葉は大変気に入りました。ほんとうにありがと
うございました。

タカさん、聡子さん、奥様、お店の皆様、ほんと
うにお元気で。お店のご繁栄と皆様のおしあわせ
をお祈りします。…」

そして、手紙の最後に特徴のあるカタカナ文字
で二つの言葉が残されていた。

「ベッセカイ！
フツゼノムスメヨリ」

(以上1月14日放送分)

完